

# 天満天神繁昌亭の成立と展開

恩 田 雅 和

はじめに

大阪市北区にある大阪天満宮の境内一角に、落語専用小屋・天満天神繁昌亭が開場したのは、平成十八年九月十五日だった。以来昼席は、ほぼ毎日満席が続いている。平成二十年二月半ばで、総入場者数が四十万人を超えた。開場一周年を機に大阪商工会議所が、経済効果を試算したところ一六億円に達すると発表された。これほど盛況が続くとは、誰もが予想しないことだった。そこで、繁昌亭が出来た経緯と現状などを報告してみたい。

開場まで

繁昌亭が出来るきっかけとなったのは、平成十五年七月

に桂三枝が上方落語協会の六代目会長に選ばれたことだった。大阪に年中無休の落語専用小屋、つまり定席のないことに不満を抱いていた三枝は、会長在職中にそれを作ろうと決意した。その場所として、三枝が所属する吉本興業が持つ演芸場、なんばグランド花月とうめだ花月の影響の及ばない土地を物色した。大阪市の最大の繁華街、ミナミとキタの地を避けたのである。

三枝がたまたま訪れた大阪市北区の天神橋筋商店街は、日本一長いという二・六キロのアーケードが続いている。中にはシャッターの閉まった店などもあったので、三枝は空き店舗で月のうち何日か落語会ができないかと、天神橋筋商店連合会会長の土居年樹にもちかけた。土居は商店街の活性化に役立つと直感し、大阪天満宮宮司の寺井種伯に

相談した。寺井はそれなら鳥居の南側にある駐車場地を提供しようかと言ったので、不定期開催のつもりで寄席がにわか定席の可能性を帯びてきた。

のちに知ることになったのだが、大阪天満宮界限は、明治末から大正にかけて八軒の寄席小屋があり、「天満八軒」といわれた芸どころであった。

さて寄席小屋の建設費用は、土居が中心となり天神橋筋商店街の店主たちがあちこち呼びかけて浄財を集めることにし、上方落語協会の落語家らも、企業やスポンサーを回って寄付を募った。その結果、約二億四千万円が寄せられてそっくり小屋の建設資金となり、土地は大阪天満宮から無償で貸与されて、一階席一五三、二階席六三規模の天満天神繁昌亭の完成をみたわけである。

ちなみに、その寄付金を寄せた人と企業はあわせておよそ六千件にのぼっており、今繁昌亭の客席天井と外観に、提灯一五二四個を飾って、篤志の個人名と企業名を書き残している。

## 戦後の上方落語

こうして繁昌亭は出来上がったのだが、落語専用の常設小屋が大阪に作られたのは、昭和二十二年ミナミに戎橋松

竹が開場して以来のことであった。繁昌亭は六〇年ぶりの定席復活と、よくマスコミに報じられたが、正確にいうと五十九年ぶりのこととなる。この戎橋松竹は、当初は落語中心のプログラムであったそうだが、開場五年ほどで漫才が主となり、昭和三十二年には閉館に至った。

その翌年の三十三年、道頓堀に角座が出来、三十四年にうめだ花月、三十八年なんば花月がそれぞれオープンし、大手興行会社の松竹芸能と吉本興業が漫才主体で勢力を競った。落語はそうした漫才の間に挟まれる色物扱いで、落語家はむしろ関西各地で勃興しつつあった地域寄席に活路を見出していった。この地域寄席は、たとえば昭和四十七年に東大阪市でスタートした岩田寄席、四十九年に大阪市阿倍野区で始まった田辺寄席など毎月定期的に開催され、しかも長年継続されて地域に親しまれていった。このため、上方落語界を現在支えているベテランや中堅クラスの大部分が、それらの地域寄席で育成されたといっても過言ではないだろう。

もう一つ、昭和四十七年にサンケイホールで第一回桂米朝独演会が開催されたのを端緒に、米朝一門を中心にホール落語が定着していったことも見逃せない。大阪市内の大中のホールだけでなく、関西主要都市にある公共施設のホー

ルにまで開催が広がり、米朝をはじめ枝雀、ざこばといった実力者、人気者が足を運んだためファン層の拡大にもつなげた。

このように戦後から平成の十八年まで、上方落語は地域寄席とホール落語によって継承されてきたが、ホームグラウンドというべき定席がほばないままの歩みであった。

それでも敗戦直後、人材難で上方落語が減びるといわれた危機を乗り越え、昭和二十二年桂あやめ（五代目桂文枝）、桂小春（三代目桂春団治）、桂米之助、桂米朝、桂春坊（現・露の五郎兵衛）が、相次いで入門した。そして昭和二十四年六月には笑福亭松之助（六代目笑福亭松鶴）が正式に父の五代目松鶴の門をたたき、上方落語復興への人材が揃って道は開かれた。

昭和三十二年四月、三代目林家染丸を初代会長とし、十八人の協会員で上方落語協会が発足した。昭和四十三年八月、松鶴が二代目会長に就任した際は、協会員が四〇人を超えた。さらに協会創立二十五周年を迎えた昭和五十七年には協会員が一〇三人となり、四〇周年の平成一〇年にはおよそ一五〇人を数える大所帯になった。特に文枝、春団治、米朝、松鶴の四人には、入門志願者が続いて弟子の数が増えたため、四人を上方落語四天王と称するよう

になった。

## 開場後

上方の落語家が二〇〇人を超えたのは、桂三枝が六代目の上方落語協会会長に選出された頃といわれている。平成二十一年一月末現在の協会所属の落語家は一九九人で、非協会員が修業中も含めて二〇人ほどいるので、総数はほぼ二二〇人の陣容である。繁昌亭が開場後あらたな弟子が増加していて、上方の落語家はまだまだ増える傾向にある。

ところで繁昌亭という名称は、昭和四十八年一月に千里セルシーホールで始まった「千里繁昌亭」に由来する。命名した松鶴が目を重ねて繁昌するようにと「昌」の字にこだわったため、「繁盛」ではなく「繁昌」になったといわれている。繁昌亭は、その松鶴の遺志を受け継いだネーミングなのである。

また繁昌亭の舞台上には、「楽」という字の額が掲げられている。これは、人間国宝桂米朝の直筆である。高座の出演者は、常に米朝の額に見守られながら落語をしゃべっていることになる。

一方繁昌亭ロビーに、赤い人力車が展示されている。爆笑王といわれた初代桂春団治が赤い人力車に乗って大阪中

の寄席を掛け持ちして回ったという伝説にちなんだ人力車である。これは、タレントの鈴木美智子が寄贈したもので、開場日に桂三枝が車夫となり、三代目桂春団治をそこに乗せて天神橋筋界隈を走ってデモンストラーションした。

上方落語の特徴の一つに、見台と膝隠しという高座で使用する小道具がある。繁昌亭には、桂文枝が生前愛用していた見台と膝隠しが保存されている。普段は用いることはないが、文枝ゆかりの落語会が企画された折などには高座に設えて、さりげなくお客さんにも見てもらっている。

これでわかる通り、繁昌亭は松鶴、米朝、春団治、文枝という上方落語四天王と何らかの関わりを持ち、あるいはそれらにちなんで四天王を顕彰しながら、運営されているのである。正面玄関前の壁に、イラストレーター成瀬國晴による四天王の似顔絵を掲示しているのも、繁昌亭が四天王の若き日の尽力が基盤になっていることを、無言のうちにお客さんに語りかけているのである。

繁昌亭は開場以来、昼席夜席の二本立て興行を続けている。昼は繁昌亭主催による午後一時から四時すぎまでの公演で、基本的に出演者は一〇人である。この一〇人のうちに、中入りを挟んで二人ないし二組を落語以外の芸である色物として必ず出演させている。夜はおおむね午後六時半

開演、九時終演にして、主に落語家に貸し出している。落語家主催の日が多いことから、独演会、一門会、二人会などの企画物が夜席は主体となっている。

このほか、中学、高校または企業や団体からの貸切要望があった場合、午前一〇時から一時間半をめどにした朝席を開いて応じている。一部中堅若手の落語家が夜席終演後の九時半から一一時頃までの時間帯にレイトショーを開催しているが、レギュラーとまでには至らず、今のところ二ヶ月に一度くらいの割合である。

約二二〇人の上方の落語家は、繁昌亭の朝、昼、夜、レイトの各落語会に出演しているわけだが、昼席だけは上方落語協会所属の落語家に限られている。また入門三年未満の若手も昼席には出演が許されておらず、こうした修業中の落語家は、平成二十一年一月八日から開始された輪茶輪茶庵勉強会に出て、研鑽している。輪茶輪茶庵とは、繁昌亭の南隣りに平成二十年十二月九日に開設された無料休憩所で、勉強会はその場所を利用して、毎週木曜日の午前一時半から若手落語家二人が出演して、入場無料で開かれている。

## 展開

先述したように、繁昌亭では毎日満席が続いているのは、昼席である。昼席は夜席と違って企画物ではなく、一人の出演者が週替わりで顔見せする興行である。

このような形態は、東京の定席では長年やられていることだが、大阪ではこれまで定席がなかったためお客さんには新鮮に感じ取られているようだ。つまり、順に出る落語家たちが客層客質によって当日の演目を決め、リレー形式のようにして一日の興行を作り上げるといふ、いわばオーソドックスな寄席形態である。

そこに繁昌亭では、東京の各定席には見られない趣向を加えている。それは、昼席終演後にその日の出演者が可能な限り、出口でお客さんをお見送りしていることである。お客さんは、舞台で見終わったばかりの落語家たちを間近で見ることができ、その日の感想を述べたり、記念写真を撮ったりして、さまざまな反応を示している。出演者にとっても、客とふれあえる貴重なひとときが生まれている。

依然東京の定席は、一〇日間の興行が厳然として守られている。繁昌亭の盛況により、一週間興行の方がアップテンポの現代にマッチしているのではないかと、東京のある

ベテラン落語家が視察に訪れた。今後、繁昌亭が何らかの形で、東京の定席に影響を与えるかもしれない。

繁昌亭が開場したことは、とりもなおさず上方落語の本拠地が出来たことであつた。これまで一門や所属事務所の違いによって顔を合わせることもなかった上方の落語家たちが、繁昌亭の楽屋へ行けば互いに打ち解けて話し合うことができるようになった。

中堅や若い落語家が、その日の出番がなくなるとも楽屋に入りするケースがよくみられる。彼らは用がなくとも楽屋に座り、先輩や師匠連の着替えを手伝い、また舞台袖で高座にじつと耳を傾けている。このようにして師匠連から学び、先輩の芸を盗んでいるのである。繁昌亭の開場は、何よりもまず三〇〇年の歴史ある上方落語を伝承する場が確保されたといつてよい。毎日昼夜、上方落語が演じられることによって、絶え間なく上方落語が次世代に受け継がれているのだ。戦後まもなくに危惧された上方落語の絶滅という事態は、繁昌亭が存続する限り回避されたとみてよいのではないか。

一方で、これが客の立場となると、毎日上方落語をショーウィンドウのように見ていることになる。伝統芸能を身近に鑑賞できているわけで、博物館・美術館にたとえると、

保存保管していた埋蔵品や芸術作品をガラス越しに入館者に展示鑑賞させていることになる。定席の役割は、このように町の博物館・美術館としての機能を持つことを、これから求められているように思う。

## 話題の仕掛け

繁昌亭は、上方落語協会会長桂三枝のアイデアによって、いくつかの話題づくりをしている。

その一つは、繁昌亭大賞の制定である。在阪新聞社、放送局などのマスコミ関係者を中心に大阪天満宮、天神橋筋商店街の各代表者に委員を委嘱して、賞の選考委員会を作った。そこで入門二十五年未満の落語家を対象に、大賞、奨励賞、爆笑賞、創作賞の四賞と入門一〇年未満を対象にした輝き賞の受賞者を選考している。

大賞、奨励賞は繁昌亭昼席のトリを、爆笑賞、創作賞は中トリをそれぞれ務める資格を得るということで、各賞の受賞者には大きな励みになっている。この五賞は平成十九年秋に第一回の選考を行い、二〇年は春秋の二回行ったが、二十一年以降は秋のみの選考となる。東京の落語界には真打ち制度があり、毎年真打ちが数人誕生し、昇進披露興行などでトリをとっている。上方の落語界には真打ち制度が

ないため、それに代わるものとして、繁昌亭大賞と各賞を選考し、めざましい活躍の中堅、若手を評価できてきている。

また繁昌亭では、平成十九年四月より、落語家人門講座を開講している。これは、一般人を対象に落語家が落語を教えているもので、毎月二回ずつ六ヶ月続け、主に古典落語二席を修得させている。主任講師が桂米輔で、桂米左と笑福亭生喬がサブにまわり、一コース二〇人から三〇人の受講生が繁昌亭の客席を会場に熱心に通っている。

半年の講座が修了した後は、修了生の希望によって中級コース、上級コースと広がり、現在は初級、中級、上級に各二〇数人が受講している。各コースとも最終日に修了式と選抜受講生による落語発表が行われ、初級を終えた受講生全員には、桂三枝が芸名をプレゼントしている。今、上級生のメンバーとこれまでの各コース修了生によって「天満天神の会」が結成されており、この会員たちが大阪府内などの病院や老人ホームにボランティアで落語会の出前を行っている。これにより、自然上方落語の裾野が広がるとともに、彼らが有力な繁昌亭のサポーターに育ちつつある。

もう一つは、平成二〇年から全国に向けて上方落語の新作台本の募集を開始したことである。繁昌亭は大阪の観光

地の一つに数えられつつあるが、全国的にみればどうしても足を運んでくれるお客さんの数は限定されている。それならば足を運ばなくとも繁昌亭に触れられる手段として、落語台本の募集が考えられた。

このアイディアはヒットして、北海道石狩市から福岡県大牟田市まで幅広い地域から四四〇編余りの台本が寄せられた。桂三枝、笑福亭福笑ら創作落語を手がける落語家六人らによって大賞一編と優秀賞二編などを選び、平成二十一年一月二十六日の繁昌亭夜席で入選作を口演した。演じたのは、三枝、福笑をはじめとして古典派の林家染丸も加わった。この新作台本募集は、平成二十一年以降もやはり全国に呼びかけて行うことにしている。

### おしまいに

上方落語協会、大阪天満宮、天神橋筋商店街の三者の強い連携により開場した天満天神繁昌亭は、三者からそれぞれに役員を出して平成二〇年三月NPO法人上方落語支援の会を立ち上げた。このNPO法人によって繁昌亭は運営されている形なのだが、実質は二者からの委託を受けた上方落語協会が取り仕切っている。

繁昌亭の設立準備は実際のところ平成十七年三月頃から

着手され、その時は大阪・朝日放送を退職していた岩本靖夫が席亭として前面に立った。しかし岩本は、繁昌亭が開場した直後の平成十八年一〇月に健康上の理由で退任した。

代わってかじとり役に指名されたのは、和歌山放送在職中のプロデューサー恩田雅和だった。恩田は、和歌山放送で十四年の長きにわたり落語番組の制作に携わり、かつ和歌山の地で地域寄席を主宰していた。このため落語に取り組む姿勢などは、桂三枝や桂春之輔といった上方落語協会幹部らの耳に、早くから聞こえていた。

恩田は、定年まで三年を残して和歌山放送を退職し、平成十九年一月、初代支配人として繁昌亭に着任した。着任後は、メインの昼席と繁昌亭主催の夜席、朝席などの出演者を決めて交渉しているほか、客向けサービスの企画などを上方落語協会の幹部連や事務局と協議している。